

移住

人間はもう一度、森に逃げ込むだろう！
山へ向かうだろう！
洞穴に入るだろう！

あなたは子供らを熱く胸に抱きしめる
そして妻を。 流浪の民（コウリー）のように家財を肩に担ぎ
炎と血のあいだを、引きずって行く
足元には、恐ろしい爆発のせいで
身の毛もよだつ地獄がばっくり口を開けることだろう
街々はみな炎と煙に包まれ焼け焦げる
住処という住処は土の上に崩れ落ちる
希望という希望は土の下で息絶えるだろう！

幻想などではない、愛する者よ！……
銃声は高く、呻きがあとからやってくる
武器の閃光は太陽をも当惑させている！
これほどの不正が目に入らないだつて？
これほどの叫びが聞こえないだつて？
アデンの子供らが血まみれになり、泣き叫ぶのが、
ヴェトナムの母親たちの震える叫びが、
おのれの愛する者たちを失って嗚咽にむせぶのが。
数日後には、おれやあなたの番だ、
自分の子らを失って座り込むか！
人の子を殺しに行くかのどちらかだ！

さもなくば、山へ、

森へ、

洞穴へ、

逃れるかだ！

親父！ どうやって医者のところへ行こうってんだい？

目は見えなくなっちゃってるし、道は狭い

一歩たりとも自分で踏み出せないってのに。

一寸たりとも自由には動けない！

道には鉄の洪水が猛々しく行き交ってるんだ！

夜も昼も寝ずに馬の肩に乗っかって

——若い時分には——山や谷や荒野へ行ったらうが、

茨や岩に道を遮られてしまった

今となっては道路脇で、待ちぼうけだ！

喉元で熱のようになつた涙をこらえて

こつち側からあっち側へも行けないんだ！

白髪頭のおのれの身辺を、誰が守ってくれると？

歩くために手を取ってくれる者さえない

おれは、親父を探して走り回っているんだが——うれしいよ

敬意なんか無くした おれたちの街で

不親切な輩の顔を見ないでくれることが！

親父、家へ帰れよ、憂鬱ともなんとかやっていくんだ！

たとえ目が人生に向かって閉じているとしても

耳やラジオのスイッチが開いていたっていいだろう

——千六百七十一人が、今日

砲弾の炎で死亡しました！

数個の味方の集落を、飛行機が

敵の家屋の代わりに砲火を浴びせました！……

おれたちの乾いた喉に涙が込み上げている

子供らはパンのかけらも喉を通らない

かれらの目は、男の涙を知らないのだ。

泣く奴があるか、敵をおそれず殲滅することは

平和のためであり自由を守るためだ！

胸を火花で打ち抜く砲弾は

一つ一つが好機なのだ、世界は楽園!! になるだろう。

親父のことを思うとおれはつらい、だが
もっと大きな悲しみがおれを滅ぼそうとしてるんだ。

さあ、災厄に見舞われた土地に想いを馳せようじゃないか
鞭が閃光を放つたびに叫びが迸る場所

壊された家々

音の途絶えた瓦礫の山

炎が広がり焦土と化した平原

そこでは木の葉も花も新芽も一度に燃え尽きてしまった！

黄色の小麦が育つはずの畑に

真っ赤な炎が

食指を伸ばし四方の彼方へ燃え広がっていく

飢えた眼差し

伸ばされた手

田畑のあいだの農民の子供の死体

生は、そこで永遠に死に絶えてしまった！

この人間の有様におういおういと泣こうじゃないか
自分のきょうだいとだって一緒に生きられないんだ

こんなめでたい連中がどうして生き残れると?!

こんな野放図な連中にどんな行く末があると?!

この問いに答えるのは銃の咆哮だ

山へ向かうだろう！

洞穴に入るだろう！

人間はもう一度森へ逃げ込むだろう！

土地に根を張って

君はこの乾き、すさんだ荒野から、いつの日か移住していくのだろう、そして僕の涙は君に別れを告げるだろう。

君の眼差しは苦く憂鬱だ。

絶望の痛々しい棘が心を傷めつけてしまった。

無秩序への悲しみが君の身体から忍耐と気力とを奪ってしまった！

君は血と汗をもって、この萎れた森に活力を与えた。

君は空っぽの手で、あのすべてを根こそぎにする嵐と四つに組んだ。

君にとって、この土地から移住することは、命から心を引き離すようなものだ！この芝生の葉一つずつ、君との間にひそかな絆がある。

君を、この暗闇を広げるばかりの雨のない無慈悲な暗雲が、

このうち続く早魃が、

道なかばで引き返してくる友人たちが、

悲しみに暮れる人々の偽りが、

打ちのめしてしまった！

君を、ジャツカルたちの不吉な騒ぎ声が、

カラスたちの休まない喚き声が

うんざりさせてしまった。

君の額は気高く清らかだ

小麦畑の向こうから、

その姿が堂々と現れるとき、太陽の百の王冠より喜ばしい。

君の頬は荒野の日差しに焼かれている。

その顔は義憤の炎に燃えている。

僕の目にはジャムシードの百の酒盃よりも尊いものだ。

その君が、悲しみ溢れる眼差しで

——それはかつて、喜びの溢れる泉だった——

こうして悲嘆と無念に翳る眼差しをして去ってゆくのだろう。

そして、僕の涙は君に別れを告げるだろう！

僕は、この土地に根を張っている。

この汚れることのない土地を愛している。

僕はここに、息の続く限り残ることにするよ。

この土地に何を求めているかなんてわからないさ！

この暗さの中でたとえ光への希望がないとしても

この乾き、すさんだ荒野で、再びやっけていくことにするよ。

僕はここで、いつの日か、この土の中から、空っぽの手で

花を撒き散らすんだ。

僕はここで、いつの日か、山の頂から太陽のように

勝利の歌を歌おう。

知っているよ、

君はいつの日か、帰ってくるのだろう！

I. ペルシア語詩の伝統と近代

日本であれヨーロッパであれ、現代詩は多くの場合、過去の「伝統詩」と対比的に成立している。伝統と結びついたあらゆる悪弊（権威的なものの見方や、凡庸な価値観、ただ習慣であるという理由によって正当化されてきた社会の理不尽さ）と手を切ること、それらのすべてに反発し、言語によって新たな世界を切り開くことが、20世紀以降の世界的な詩の流れを作ってきた、と言ってよいだろう。

日本語や英語、フランス語などの場合と比べても、イランの場合、現代詩人たちにとってペルシア語の伝統詩の重圧は、相当なものだったといえる。1920年前後から既存の韻律形式に変化をもたらす詩が現れ始めるが、それらはしばらくの間、古くからの詩に慣れ親しんだ人々の反発を買うか、嘲笑をもって迎えられた。だがいつの時代も同じであるように、やがて若い世代の詩人たちが、新しい詩の潮流を形作っていくことになる。両者、詩の革新派と古典詩の擁護派の論争は政治的見解の対立も絡んで長年続き、結局のところ、いわゆる口語詩や自由詩がイランで認められるようになるまで、およそ半世紀近くの時間を要した。

これほどまでの伝統の根強さは、何に由来するのだろうか。考えられることの一つは、この地域において詩が重要な知の枠組みを形作ってきたこととの関わりである。「詩 (shēr)」には様々な形式があるとはいえ、究極的に、言語の、すなわち人間精神の普遍的な価値に資するもの、と考えられてきたためではないだろうか。(この違いは、例えば日本語なら、「詩」と短歌、俳句が併存して現在に至っていることと考え合わせても興味深い。かの地の人々からすれば、古典の和歌も含めて、それらは等しく「詩」として理解されるだろう。) 一般的に言って、詩には至高の価値が与えられており、それらは個人のものではなく、いわば共有財産なのだ。

『始まりの現象』(1985)において、文学作品の「始源」について考察を行ったエドワード・サイードは、近代人の「書くこと」における独創性の問題に触れつつ、他のテキストとの連関によって存在し、読まれる詩の例としてコールリッジの「ウィリアム・ワーズワースに寄せて」を引用している。「ただひとつの時代に属し、ただひとつの空間より／影響を発す。力と行為において、／彼らは永遠であり、時間は彼らとともにあらず……」ⁱ。詩はたしかに、固有の時間と空間のなかにいる詩人によって書かれる。けれどもその詩、とりわけ優れた詩は、そのような限定性にとらわれ続けることはない。その固有の時間と場所を超えて、他の言葉、作品や書き物に引用され、何らかの連関を生み出していく。「偉大な詩はそれ自体の連続した場所と時間であり、それは他のエクリチュールと〈ひとつの思想のうちに〉合体、混合する」ⁱⁱ。これらの示唆的な言葉から思い浮かぶことは、ペルシア語の詩は、その社会への受け入れられ方から言って、詩人の個に立脚した「近代詩」の理念とは別様の、とはいえ前近代という思考の枠組みとも異なる、非-時間的な生命を生きているのではない

か、ということだ。その生命はひとえに、詩を読み、語り継ぐ人々の存在によって息を吹き込まれ、長らえていく。

II. モシーリーの詩「移住」について

ここで紹介するフェリドゥーン・モシーリーは、1960年代を一つの頂点として見た場合のイラン現代詩のなかで、さほど目立った存在ではない。詩行の構成や言語の鋭さといった点で多くの人々を魅了した反体制詩人アフマド・シャームルーや、荘重な、かつ親しみのある言葉遣いで現代の叙事詩を詠ったメフディー・アハヴァーネ＝サーレス、女性としての赤裸々な心情を詠い、その孤独の深さにおいて現代人の生の深淵を指し示したフォルグ・ファッロフザード、瑞々しい自然を描き、人間の知について東洋的価値観から捉え直そうとしたソフラブ・セペフリー。また、彼らの先駆けとなった、韻律改革者にして現代的・社会的テーマで詩作を行なったニーマー・ユージー。

ニーマーの弟子たちとも称される、際立った個性をもつこれらの詩人たちのなかで、彼らと同世代にあたるモシーリーは、誰にもまして「平易な言葉遣いの」詩人として知られてきた。彼の詩に説明はいらぬ、とイランの人々は言う。いまひとりの現代詩人ナーデル・ナーデルプールもまた明晰な言語を用い平易であると言われたが、モシーリーはナーデルプールに比してもわかりやすい、と言うのだ。日本に限らず現代詩を愛好する人々は往々にして、詩によってむしろ驚かされ、幻惑される方を好むとすれば、この評価は常に褒め言葉であったとはいえないかもしれない。しかしこの「平易さ」はそれとして一考に値する要素でもある。それはすなわち、より幅広い尺度で、より遠くの読者へも届くかもしれない、という可能性を秘めているからだ。『薔薇園』で知られる13世紀のペルシア文学を代表する詩人サアディーが、まさにそうであったように。

詩「移住 (Küch)」は、1968年の第4詩集『春を信じよ (*Bahār rā bāvar kon*)』に収録されたⁱⁱⁱ。モシーリーは1926年テヘランに生まれ、一時期を北東部のマシュハドで過ごしたこともあった。当時の一般的なエリートの道を歩んだ彼は、電信省に勤め、その後ジャーナリストとしての活動に転じ、詩作を行うかたわら雑誌等の出版活動に加わった。1960年に発表された「路地 (Küche)」はかつての恋人への哀切な感情を詠った詩で、同時代におよそ文学の愛好者でこの詩を知らない者はいないといわれるほど広範な人気を博し、後々まで、モシーリーといえば「路地の詩人」という肩書きがついてまわるほどだった。モシーリーの作品には、四行詩 (ルバーイー) を含む伝統的な形式の詩と、「シェエレ・ノウ」と呼ばれる自由詩形の詩があり、晩年に進むにつれて自由詩形の占める割合は増えたが、伝統的な詩も書き続けた。モシーリーの用いる簡素な言葉は、いずれも伝統に深く根差したものであり、なおかつ現代のイランを生きる一人の人間の、日常的な生活感覚が率直に表されている。

反戦をテーマとしたこの詩の眼目については、文字通り、説明の必要はないだろう。1960年代、長期化するベトナム戦争を背景に書かれたことは、詩の言葉からも明らかである。イ

ランの詩人であるモシーリーは、戦争と爆撃の、人類が自らに対して引き起すとてつもない災厄を、読者の眼前に据えるようにと描き出す。それは文字として書かれる詩というよりは、目の前の人間に直接語りかけ、訴えかけようとする詩だと言ってよいだろう。詩人の直接の呼びかけの対象である「父親」は、舞台の上の一種の配役のようなものと考えられる。父への辛辣さは、この世界を築いてきた人々への批判や苛立ちに起因しているのではないかと考えられるが、同時に、同じ父への憐れみと労りの言葉から、他者への無関心や利己主義が蔓延する社会の様子が映し出される。戦争の災禍に苦しむかの地と、人間的な優しさを喪失した「こちら側」の社会は、決して無関係ではない。年老いた父親は、医者のところへ出かけようとしているが、もはや自身で歩くのもままならない。人生に対して目を背け、現実を受け入れようとしない父は、世の中の変化に気づかず、世界の情勢がどのように推移しているか、知ることもない。人間の悲惨さは、一方ではこの戦争を引き起こす者たちにあり、また一方では、この悲惨さへの無知にある。詩人は、たとえ遠く離れていようと、この悲劇をまざまざと「視る」力を、詩的イメージによって喚起しようとするのだ。

詩の言葉が、歴史叙述の言葉や科学の言葉と異なるのは、何かを予見するという点においてである。アリストテレスが『詩学』で述べているとおり、歴史はすでに起こったことを述べるのに対して、詩はこれから「起こりうること」を述べる。「詩作は歴史にくらべてより哲学的であり、より深い意義をもつ」^{iv}。詩人モシーリーは言う、「数日後には、おれやあんたの番だ」と。人間が人間の「きょうだい」の住処を破壊し尽くす惨劇は、すべてを燃やし尽くす憎悪の炎の果てしない広がりとして、われわれの脳裏に刻みつけられる。

タイトルの「移住」は、ペルシア語で「クーチ」という語だが、一般には遊牧民が移動し、居住地を変えることなどを指している。けれどもここでは、イスラームの預言者ムハンマドの「聖遷（ヒジュラ）」に発する、身の安全のために別の場所へ移り住むこと、避難することを含んでいるだろう。「逃れること」は身を守るための、宗教的に正当な行為として、長い文化のなかで位置づけられてきた。しかしここで、われわれを「移住」へと駆り立てるものは何か。詩人が、「鉄の洪水」と呼ぶのは、鉄の塊である自動車やその他が、人間の生身の身体の次元をはるかに超えて、ある人々を危険に晒す事態だ。高度な文明の発達人が人間に教えたのは、人間的な素朴な優しさや思いやりの感情ではなく、他者への冷酷さと、人間自身の無力ではなかったか。人類は文明以前へと逃避せざるをえないだろう、と詩人は言う。だが、ここに想起されていた原初のアジールとしての山や洞窟、森も、もはや私たちの聖域になりえないほど、状況はますます深刻なものになっている。

III. 根を張ること

聖域への避難、という考え方は古くからあるものの、この詩を単に「移住」を求める詩であると受け取るなら、おそらく詩が意図したこととのあいだに、若干の理解のずれが生じてしまうだろう。当然のことながら、政権の側にある人間でもなければ、生活者としてのわれわれが真っ先に求めるものは平和であって反戦である。しかしなお、政治の狡知は「平和」

をも口実にして人々を戦争へ駆り立てるのだ。「銃の咆哮」は個々人の叫びや嘆きの声をもかき消してしまう。どうすれば良いのか。その解決策を詩は与えてくれるわけではない。かつて、ある詩の結末が別様であるべきだったと批評家から批判を受けた際に、モシーリーは次のように答えた。「私は自分が望むことを書いたのではなく、自分に言い得ることを書いたのだ」。この「移住」も、そのようなわれわれのなかにある「痛み」を明瞭に指し示す詩なのだ。少なくとも、この状況に目を向けることが、次の行動の契機となるだろう。

1979年のイラン革命後、「移住」の詩で書かれていたことが現実のものとなったかのような、隣国との戦争が勃発する。詩人が警告した、自分の子を殺されるか、あるいは（正義の名の下に）人の子を殺しに行くのか、という言葉が蘇ってくる。だがもちろん、彼が予言をしたと言いたいのではない。前世紀から今世紀へと続く数々の戦争がいずれも大国の力の論理と無関係ではないことを、われわれは承知している。

革命によって体制転換の起こったイランは文化的にも大きな打撃を被った。イラン・イラク戦争による混乱のなか、自分自身と、自らの子供を守るために、数多くの人々が祖国を離れ、ヨーロッパやアジアの各地へ移住していった。そのようななかで、第6詩集『土地に根を張って (*Rishe dar khāk*)』(1985年)が刊行される。この詩集の表題作は、モシーリーの年来の友人が、アメリカへ去ろうとするときに、彼も一緒に来ないかと誘いかけられたときの応答として書かれたものだという。この詩についてのインタビュー映像がインターネット上で見られるが、詩人は「一晩考えさせてほしい」と言って、翌朝この詩を返したのだそうだ。ある重要な問いかけに対して、詩をもって答えるところはいかにもイランの詩人らしい。

この詩から、さらには詩人自身の語りからもわかるのは、第一に、モシーリーが、自らを「土地に根を張る」詩人であると宣言していることだ。(タイトルの原語をそのまま日本語に置き換えるなら、「根は土のなか」ということになるが、この「土」の含意には、いくぶん神秘主義的な、物質的存在としての人間の悲哀をも感じ取ることができるだろう。) それに加えて、そのように語る詩人自身の言葉が、やはりペルシア語の古くからの伝統を深く受け継いでいることに気がつく。友への尊敬と思いやりに満ちた言葉の数々は、日本語の話者からするとだいぶ大仰に感じられるところがあるかもしれないが、イランの人々が日頃からこれに近い話し方をすることがあるのを、同地の文化を多少でも知る人なら見聞きしたことがあるだろう。「いつの日か、この土の中から・・・花を撒き散らすんだ」という一節は、かのオマル・ハイヤームの『ルバイヤート』のなかの、「一千年後、この土の中からもう一度生えてくる望みがあったなら」という詩の一節を想起させるものだ。

IV. アジールとしての詩

さて、このようにして書かれた詩が、詩人自身の願望に代わってそれ自身アジールとなり、いかにして時代や地域を超えていくのか、という点に、最後に触れてみることにしたい。モシーリーの、そしてペルシア語詩人たちの偉大なる先達であるサアディーもまたある種

の「平易さ」で知られた詩人であるが、そのことはしばしば「模倣不可能な平易さ」と言い表される。限りなく平明である、ということは単にありふれた言葉を用いることを指すわけではない。それらの言葉が的確に選ばれ、配置され、よく文意を達していること、普遍的な尺度というものがもしあるなら、その基準となりうるような表現であること、とひとまず言えるだろうか。

よく知られた「人類 (banī ādam、すなわちアダムの子ら) の詩」を引用しよう。「人類とは互いに一つの体の各部分のようなもの／それは一つの本質から創造されたもの／あるとき一つの部分が痛み出せば／他の部分も落ち着いてはいられない／もし君が他人の苦痛を悲しまないならば／君を人間の名で呼ぶには値しない」。

サアディーの提示した「人間 (ādam)」の普遍的次元が、現代の人々にとって理想化されたものに映るのだとしたら、その責任は、これほど完膚なきまでに「人間性」を虐げ、貶めてきた人々にある。ここでは人間が現実はどうあるか、という定義について述べようとするのではない。むしろそのあるべき姿によって、この「人間」は捉えられている。現実はずしこの通りでないとはいえ、いやかえってそのために、といえるかもしれないが、ペルシア語の詩が一千年の間に培ってきた思想の根幹には、このような限りない人間性への尊重の態度がある。

革命後のイランで、モシーリーの詩には再評価の動きが見られたようだが、それもまた彼の人間性に立脚した、言葉の簡素さと現代社会を見る眼差しの誠実さが、人々の心に届いているからだろう、と思われる。かつて人気を博した「路地」は今でも人気のようだが、「移住」についてはどうだろうか。

そもそもこの詩に出会ったのは、YouTube で公開されているイランの文学番組を通じてであったが、その朗読を聞きながら、意味を理解するよりも先に、音の喚起するイメージによって、大きな衝撃に捉えられた。その後、インターネット上で思いがけず行き当たったのが、ある若い女性と思われる人の「移住」の朗読^{vi}だった。動画の画像の方は単に詩の場面を説明しようとしたものに過ぎないが、その声といくぶん古風に聞こえる澄み切った発音があまりに美しいので、ダウンロードして何度も聴き入った。調べてみて、どうやらアフガニスタンに在住の女性らしい、ということだけがわかった。その言葉が迫真的な響きを持って迫るのは、この詩を選んだ朗読者の、現実の経験と思いがそこに込められているからにちがいない。

アフガニスタンとイランとは文化的な繋がりが深く、アフガニスタンの言語であるダリー語は、イランのペルシア語と比べて、発音や語彙において多少異なるところもあるとはいえ、そのまま「ペルシア語」と称されることもあるくらい、近接した言語である。何をおいても、これらの地域はペルシア語の古典にあたる詩を長い間共有してきた。「アフガニスタンのモスクにおいてさえ、『コーラン』の次に子どもが教えられるのが、ハーフィズやサアディーの詩だと聞けば、驚かれるかもしれません。今日において詩は、人々の心にあり、日常の心に寄り添うものになっているのです……」^{vi}。そう語ったのは、2023年末に来日したア

フガニスタン出身の詩人ソマイア・ラミシュさんである。祖国での活動を断念し、異郷の地での生活を余儀なくされた彼女は、民衆の抵抗としての詩に期待を寄せる。「詩は美を創造し、闇を照らして新たな意識を生み出すもの」であり、「ランプに灯される光」でもある、と彼女は言う。

今日、ニュースを通してであるといえ、爆撃の音は止まない。焦土の広がりや瓦礫の山を映像や写真で目にし、追い詰められる人々の嘆きの声を聞きながら、人間の知恵をもってしてなぜ止められないのか、と苦しい思いばかりが募る。『現代詩手帖』（2024年2月号）では抵抗の詩についての特集が組まれたが、そのような苦しみを肌身を感じている人は実際にどのくらいの割合であろうか。感情的になることを恐れ、警戒するのだとしても、なお理性の痛みというものがあるのではないか——。ハイヤームの、そしてモシーリーの詩に詠われた、花となるべき人間のように、土地に植えられたオリーブの木はその地に暮らした人々の記憶を持ち続け、その根は地中深くに生き続けるだろう。一編の詩をめぐる長く書き連ねてしまったが、反戦の詩について、その可能性について、まだもう少し考察を続けていくことにしたい。

ⁱ エドワード・W・サイド著『始まりの現象——意図と方法』山形和美／小林昌夫訳、法政大学出版局、1996年。27頁。

ⁱⁱ 前掲書、同頁。

ⁱⁱⁱ 本稿を書くにあたっては、フェリードウン・モシーリー全集（*Bāztāb-e nafas-e sobhdamān: kolliyāt-e ash‘ār*, 2 vols, Tehran, 1384）のほか、K. アーベディーによる概説（*Kāmyār ‘Ābedī, Moqaddame‘ī bar she‘r-e Fārsī dar sade-ye bīstom-e milādī*, Tehran, 1394）等を参考資料とした。また文章の後半で触れる、ラシード・カーカーヴァンド氏の解説と時代の証言がおおいに役に立った。番組のURLは以下。

[<https://www.youtube.com/watch?v=doEmwhcG0XY>]

^{iv} 『アリストテレス詩学・ホラーティウス詩論』松本仁助・岡道男訳、岩波文庫、1997年。43頁。

^v URLは以下。[<https://www.youtube.com/watch?v=e8zyhThGIMA>]

^{vi} 岡和田晃編著「「アフガニスタンと日本の詩人による知性対話 言論の自由と女性の社会的地位、社会の解放について」へ参加して——付：ソマイア・ラミシュさんへの質問とその回答」（2024.1）。この報告は、2023年12月に来日したソマイア・ラミシュさんのトークイベントを報じたウェブサイト「ウェブ・アフガン」にて発表された。URLは以下。[<https://webafghan.jp/somaiaramish-vs-japanese-poets/>]